

13 S・アンマル教授著『アヴィセンヌ』

泉 彪之助

演者が一昨年チュニジアで開かれた国際医学史会議に出席した際、入手したアラブ医学・科学史の中に、会議総裁アンマル教授の著書「アヴィセンヌ」があった。この書には種々興味深い点があるので、アラブ諸国における医史学研究の例として紹介し、アビセンナについて考えて見たい。著者アンマル教授は、チュニス大学の精神医学の名誉教授で、チュニジア医史学会会長、国際医学史会議の副会長も務めた。

アビセンナの出身民族はペルシャ系とされているが、明確でない。アビセンナは現・ウズベキスタンのブハラ近郊で生まれ、現・イランのハマダンで死去した。父親は現・アフガニスタンのバルフ出身、母はブハラ近郊の出身である。ブハラは中央アジアにあるが、政権がはげしく変わった。アビセンナが、トルコ系遊牧民の子孫と

いう説もあるらしい。「アヴィセンヌ」によれば、多くの民族、国家がアビセンナを自分たちの誇りとしているという。

一九六六年、ブハラが属していたソ連と、ハマダンがあるイランとの合同調査団が、墓を発掘し調査した。アンマル教授は、アビセンナの頭骨の写真を掲載している。

「アヴィセンヌ」には、一六世紀復刻のアビセンナの主著カーヌーンの原典表紙が掲載されている。書名はクトゥブ・アル・カーヌーン・フィー・アル・ティップ（文字の通りに表記）、意味は「医学における規則の書物」で、ラテン訳名、リーベル・カノーニス・イン・メディキーナは書名の忠実な訳となる。ただラテン訳名はリーベルと単数形になっているが、原典はクトゥブと複数形である。

イスラム世界最初の製紙所は、七五七年、サマルカンドに作られたので、アビセンナの著作は紙に書かれたと思われるが、大部の書物を一冊に製本する技術がまだなく、複数形が用いられたのではないかと想像する。ラテン

語には一冊の本を複数形で表現する習慣がなく、単数形が用いられたのであろう。

五十嵐一氏が翻訳の底本としたテキストでは、書名にクトゥブがなく、ただアル・カーヌーン・フィー・アル・ティップとなっている。カーヌーンの日本語名は、医学規典、医学典範と専門家でも二種あるが、あるいはこのような原典テキストの相違から来しているのかも知れない。

カーヌーンの著者名には、アル・シャイフ・アル・ライスという尊称が含まれている。シャイフもライスも長、おさ、指導者というような意味だが、五十嵐氏によれば、アル・ライスは「第一に主要な」という意味に解すべきという。アビセンナは Prince of Physicians と呼ばれたといわれ、これはアル・ライスに王子という意味もあるからだ、Physicians にあたる言葉は、アラビア語の尊称にはない。イスラム世界におけるアビセンナの評価は、単なる医学者としてだけではないので、尊称はそのことを示しているよう。

アビセンナは広く自然科学一般に通じ、詩人でもあり、

思想上も大きな業績を上げた。アビセンナのもう一つの主著は、キターブ・アル・シファー「治癒の書」(アンマル教授によれば「充足の書」)である。これは論理学、自然学、数学、形而上学を含む一種の百科全書で、この「治癒の書」のある部分を簡潔にまとめたのが、キターブ・アル・ナジャット「救いの書」である。「アヴィセンヌ」は、この「救いの書」の表紙も掲載している。なおアンマル教授が用いた資料と、野間科学医学研究資料館所蔵の資料とは同系統のものらしく、資料館所蔵のカーヌーンは表紙が同じで、この「救いの書」も合本されている。

(老人保健施設・陽翠の里)